



Title	意味の所在と理解の意味
Author(s)	小川, 了; OGAWA, Ryo
Citation	独語独文学科研究年報, 26, 50-67
Issue Date	1999-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/26118
Type	departmental bulletin paper
File Information	26_P50-67.pdf



意味の所在と理解の意味

小川 了

1. 音声であれ書記であれ、その方法はいずれにしても、言葉を複数の人間の間でやりとりする際に当事者たちに共通して見られる誤謬（あるいは便宜的な仮定）は、一方の者から他方の者へ言語以外（あるいは言語以上）の何事かが伝達されているという認識である。言語はその発信者から受信者へ、両者に共有可能な（言語以外の）何事かを伝達しているという考えは、確かに社会生活においては便利なものではあるが、同時に人間の想像力（あるいは創造力）を挫いてしまう最初の障害かもしれない。我々が何か重大な社会問題を経験したとき、人間のあるべき姿を説く勧告や反省の弁の中ではしばしば「想像力」という言葉が語られる。しかし不特定多数の人々に向かって語りかける立場にある者たちの言葉の力は、他でもない、共有できる「意味」の伝達可能性に由来している。彼らが「想像力」という言葉を語る時はすでに、それに耳を傾ける者の想像力は鈍磨しているのではないだろうか。彼らが、自覚の有無に関わりなく、「識者の言葉」「専門家の言葉」を騙っている限りはそうである。

2. 言葉に意味があるかないかといった問いの立て方はそもそも生産的とは言えない。意味はあるに決まっているからだ。問題は意味の所在と、その共有可能性の有無である。これとよく似た認識を『コトバの〈意味づけ論〉』という著書の中に見出すことができる。まず最初にこの著者たちの主張を批判的に検討して、言語コミュニケーション（あるいはそれについて語ること）の問題の所在を明らかにしたいと思う。

この著者たちは、言葉には確定的で、他者と共有可能な意味はないという命題から出発している。意味とは「それぞれの人によって意味づけされる意味、つまり、《意味づけする者にとっての意味》である（13頁）」。それは必ずその人間の位置する状況に対する意味づけとともに行われるので、意味づけ済みか否かで、「状況」と「情況」が区別されることになる。

状況という言葉は外界や身体内で進行する「物事の集合」を表わすのに当てられる。状況はいうなれば、意味づけられる以前の意味なき物事の集合であり、それは時間にそって淡々と推移して行く。一方、《情況》の方は、人間によって「意味づけられた状況」のことであり、能動的態度であれ観察的態度であれ、主体が関与する概念である。（13頁）

このこととパラレルに「コトバ」と「言葉」の区別が設けられる。

本書の考えは、正確には「コトバは意味を担う前の記号である。《コトバ》は、意味づけられることによって《言葉》となる」と述べるべきではない。（中略）コトバは意味づけられて意味を担った言葉となる。しかし、それは主体の《情況内》のことであって、発話によって外化されたコトバそのものは

意味を担っていない。しかも、コトバが状況内で担う意味は、(中略) 状況とともに決まるのであって、あらかじめ決まっているわけではない。(21 頁)

彼らが「コトバ」とか「外化されたコトバ」と呼んでいるのは、「記号論における記号、すなわち、『記号表現—記号内容』、あるいは、『能記—所記』、あるいは、『意味するもの—意味されるもの』、としてとらえられる記号概念の上半分 (ここでは左半分。筆者) だけを示す表記の工夫(23 頁)」だそうだ。彼らは状況内のコトバが、理解主体の意味づけによって状況内の言葉へ変換されるプロセスを、多彩な術語を駆使して解説しているのだが、そのことについてはここでは取り上げない。

以上の引用から分かるように、意味づけという観点によって言葉の確定的で共有可能な意味という考え方が相対化されているのだが、この観点自体の抱える問題は大きい。彼らは次に「コミュニケーション」の可能性について話を進めている。意味は必ず理解者個人の状況内における意味であるが、こうした個人的な営みの上に、人間はどうして言語コミュニケーションでの相互理解の信念を抱きうるのか、という問いに彼らは以下のように答える。

コトバがコミュニケーションのメディアとなりうるのは、コトバの意味づけについて、主体間に《共有の秩序性》があるからである。人々の信念は共有の秩序性を基礎として成り立っている。不確定性があるとはいえ、意味づけはデタラメではない。それなりの秩序性もある。個人固有の秩序性はその人の個性であるが、秩序性の中には、主体間に共有された秩序性もある。共有の秩序性には、《意味づけの仕方に帰属する秩序性》と《意味知識に帰属する秩序性》とがある。われわれは、これらの共有の秩序性を手掛かりとして、他者の状況、つまり、他者の話の内容や思いや考えをそこそこ理解できるのである。(27 頁)

彼らが「意味づけの仕方に帰属する秩序性」と呼んでいるのは、「動詞や『テニヲハ』などが、意味チャック (意味づけによって形成される意味のまとまり) を関係づけたり位置づけたりする『仕方』に関する秩序性 (27 頁)」のことで、「コミュニケーション経験をつうじて習得され反復強化されて、きわめて安定した秩序性として共有されている(29 頁)」暗黙知として定義されている。一方「意味知識に帰属する秩序性」というのは、極めてあいまいな定義だが、例えば「少年」という語に関して「おそらく、誰もが、〈男〉〈年少者〉〈少女との対概念〉などの知識を (29 頁)」もっているだろうが、そこに見出せる個人的な知識の差異を超えた構造的共通性のことだという。

3. 私が「意味づけ論」に関して指摘したいのは以上の点だけである。かなり大部の著書であるが、序章の中で語られている以上の点がこの理論の成否を左右すると考えられるからだ。

彼らの術語の定義が正当なものであるなら実に奇妙な事態が生じることになる。意味づけされる以前のニュートラルで無色透明な何かをカタカナ表記しているのなら、「コトバ」というコトバが何を表現しているのが読者には理解できないことになる。なぜなら、それは著者たち自身にとっても意味づけされる以前の何事かであるはずだからだ。意味づけ以前の事態についてどうして彼らは語りうるのか。それが彼らの語るべき対象となったときには、「コトバ」は、彼らの「状況内」で常に「言葉」となって彼らの手から

すり抜けてしまっているはずだ。経験の外部に想定される何事かについて語ることは不可能だ。何かを語っているなら、それは彼らの経験内にあることだけで、意味づけが施された後のことでしかない。彼らの手元に残るのは常に「言葉」でしかないだろう。これと全く同じことが「状況」と「情況」にも言える。彼らは「情況」について何かを言うことができても、「状況」については何ひとつ言い得ないはずだ（例えば「A あのアホが、ボタンを掛けちがいがやがって！／B まったく、いい迷惑だよ。」という例文に続く解説、「この会話で『ボタンを掛けちがう』がコトバ通り意味づけられれば、誰の迷惑でもない(52頁)」（下線は小川）に見られる「コトバ」の使い方から、彼らがそれをいわゆる「字義通りの意味」に近いものとして想定しているのは承知で、そして承知しているからこそ、私はこうした批判を述べているのである）。

さらに奇妙なことに、個人的な内的営みである意味づけには、他者との交渉のためのルートが開かれているというのだ。暗黙知としての「テニヲハ」、語の概念的な知識といった「主体間に共有された秩序性」がその足がかりとなると彼らは言うのだが、しかしこれは、言葉には他者と共有可能な確定的意味があると述べているのと同じではないだろうか。彼らはこの種の反論に対して、随所で予防線を張っているけれど、どうしてこの二者だけに「共有の秩序性」という特別な地位を与えているのかは不明のままだ。この秩序性を前提にするなら、彼らの主張全体は解釈理論にすぎないことになるので「コトバ」「言葉」等の区別は無用のものになるだろう。こうした区別を（私は前述の通り理解できないのだが、ここから彼らが引き出す意味づけが個人的営みであるという一点に関しては、それを述べるのにこの区別は必要ないけれど、同意できる。その意味で彼らがこれを）堅持するのであれば、彼らが「共有の秩序性」と呼んでいることも「情況内」の産物だとみなすべきだろう。言語コミュニケーションが成立する（という信念が維持される）のは、言語の属性が理由なのではなく、もっぱら言語外的な要因によるのではないだろうか。「共有の秩序性」という言語の特性をコミュニケーション成立の根拠に据える必要はほんとうにあるのだろうか。

4. 「共有の秩序性」もまた個人の経験的な産物であって、それにそれ以上の地位を与える必要はないという反証を、彼らが「意味づけの仕方に帰属する秩序性」と呼んでいる「テニヲハ」の機能分析を検討して、示そうと思う。著者たちが助詞「ハ」「ガ」に与えている定義は次のようなものである。

「太郎は」の「は」は、<先行する意味チャンク「太郎」に焦点を据え、その周辺に励起するかもしれない他の意味チャンクにも目配り・気配りを留保する*>という意味づけ操作を作動させる助詞であると考えられる。（中略）「ガ」の機能は、<先行する意味チャンクを焦点に据え、その周辺に励起するかもしれない他の意味チャンクをマスクする(覆い隠す)>という意味づけ操作である。（124頁）

（*引用文二行目の「気配りを留保する」は、「留意する」と読み替えなくては私には理解できない。）

この定義に謳われている「ガ」と「ハ」のオペレータ機能（先行する意味チャンクへの意味づけ操作を指定する機能(28頁)）の差異の説明として、彼らは、ある週刊誌の見出しの文(1)と、それに一部手を加えた文(2)を比較分析している。

(1)「今、歌舞伎町がおもしろい」

(2)「今、歌舞伎町はおもしろい」

この文例に対する彼らの説明によると、双方の文はそれぞれ次のようにパラフレーズされうるといふ。文(1)は「<あなたはいろいろな盛り場を思い浮かべるかもしれませんが、そんなものには目隠してしまいなさい、今、おもしろいのは歌舞伎町ですよ>と語りかけている。これに対して、もうひとつの文は、<あなたはいろいろな盛り場を思い浮かべるかもしれませんが、でも、くらべてくださっても結構ですが、今、おもしろいのは歌舞伎町ですよ>と語りかけているといえよう(124頁)」。下線は小川による。「ガ」には、「歌舞伎町」が連想させる可能性のある類似の要素(ここでは他の盛り場や歓楽街)を覆い隠す機能があり、それに対して「ハ」の方は連想対象に目配りさせる、という解釈だ。

一見なるほどと思わせる説明だが、機能のちがいを示すために用いられている文(1)と(2)のパラフレーズがどちらも「今、おもしろいのは歌舞伎町ですよ」と同じ文になっているのはどうしてだろう。

私の語感では、(1)のパラフレーズは肯けるが、(2)の場合は別のパラフレーズの可能性もあるように思う。文法的な事柄を云々せずに自分の語感で(2)を別様にパラフレーズするとしたらこうなる。<あなたは昔の歌舞伎町(や、あるいは未来の歌舞伎町を)を思い浮かべるかもしれませんが、でも、くらべてくださっても結構ですが、今の歌舞伎町は、おもしろいですよ>。つまり(2)の文に、もうひとつ(2)'を読み取れると考えているのだ。この解釈は(2)のパラフレーズには盛り込まれていなかった観点によるものだ。

(2)' 今の歌舞伎町は、おもしろい。

さらに「ハ」「ガ」の差異を見やすくするために、「今」という語を取り除いて二つの文を比べてみよう。

(3) 歌舞伎町がおもしろい。

(4) 歌舞伎町はおもしろい。

一番シンプルな(3)(4)から考えてみよう。それも単文として眺めるのではなく、問いと返答というコミュニケーション行為において捉え直してみよう。例えば「①東京ではどこがおもしろいんだい?」という問いに対しては「それなら、歌舞伎町がおもしろいよ」とも、「そうだねえ、歌舞伎町はおもしろいよ」とも答えることができる。他方「②歌舞伎町っておもしろいかい?」と問われたら「うん、歌舞伎町がおもしろいよ」という答えより、「うん、歌舞伎町はおもしろいよ」の方がはるかに自然な受け答えだ。

①は「どこが」と問うことで、主語となる対象を明確な形で浮上させることを求めている。問いも返答も「ガ」を使っているということもあるけれど、何よりも「どこが」という部分にダイレクトに対応している点で、「ガ」を使った(3)の文は返答として自然な整合性を感じさせる。これに対して(4)の返答は問い①の(「どこが」に対しではなく)「おもしろいんだい」という部分により強く応じていると言えるだろう。「東京におもしろい所はいろいろあるけど、そのひとつは歌舞伎町だよ(これを省略すると「東京でおもしろいのは歌舞伎町だよ」となる)」と言うつもりで「歌舞伎町はおもしろいよ」と答えることはできるだろう。

①のタイプの問いに対する答えには、一本釣りとでも言うべき、対象の限定的発見が要求される。「ガ」も「ハ」もその要求に応えるための機能を持っていると言える。(3)は盛り場の名称を、(4)は属性を出発点として「歌舞伎町」を導き出した返答として読める。

②の場合は、問いにおいてすでに「歌舞伎町」の名が特定されているので、返答の内容としては(質問

者と返答者の双方に) 既知の事柄に改めて力点が置かれる必要はない。従って返答に求められるのは、「おもしろいかどうか」という属性の確認である。その要求に応えるには「ハ」の方がふさわしいようだ。ここでは話題になり得る二つの要素(歌舞伎町とおもしろさ)は問いの中に示されており、何かを類似の連想から選り分けて限定的に発見しなくてもいいので、「ガ」を用いた返答はそぐわないと言えるだろう。

②のタイプの問いに対する答えには、話し手と聞き手の間ですでに既知のものとして認定されている対象の性質や状態に言及することが要求される。「ハ」にはその要求に応えるための機能があると言えそうだが、「ガ」にはこの問いに対する返答としては優先的にそれを満たす機能は見出せない。

私の解釈をまとめるとこうなる。「ガ」には「対象の限定的発見」の機能が認められる。「ハ」には「対象の限定的発見」の機能と「既知の対象の性質や状態描写」の機能の二つが認められる。「ハ」に見られる機能の二重性は、「AはBだ」という形式の文がAとBのどちらを起点として、どちらを到達点としているかという話し手の意図に左右されて生じる意味論的な差異として捉えることができる。この解釈をベースにして、「今、今の」という規定語を伴った例文(1)(2)(2)'に戻ろう。

この前二者の文はいずれも、「今は、東京ではどこがおもしろいんだい?」という問いに対する返答(対象の限定的発見の「ガ」「ハ」)として読める(「今は、歌舞伎町がおもしろいよ」「今なら、歌舞伎町はおもしろいよ」)。この機能は著者たちが「ガ」だけに与えたものと近いものだ。上の引用からも分かるように彼らは「ハ」に対してはそうした定義をしていない。(2)のもともとのパラフレーズに対して第二の読み方の可能性を示すために、私が持ち出した(2)'だけは、「今(の)歌舞伎町っておもしろいのかい?」という問いの返答(既知の対象の性質や状態描写の「ハ」)として読まなくてはならない。これで、どうして(1)と(2)のもともとのパラフレーズが、「今、おもしろいのは歌舞伎町ですよ」という同一文になるのかが判明した。

「ハ」には機能の二重性があり、「ガ」と必ずしも常に対立的な関係になるとは限らないので、(1)(2)どちらの文に対しても同一の問いを想定することができるのである。この時、彼らのパラフレーズを保証しているのは、「ハ」の一方の機能であって、他方の機能は関与していない。これは著者たちが「ハ」のもうひとつの機能を見落としているということである。つまり、「AはBだ」の文で、「ハ」の機能を「先行する意味チャンク」Aとの関係でしか考察していないということだ。それ故、著者たちの「ハ」と「ガ」の定義は全く対照的な構図を描くのである。しかし、これでは自分たちの行なった(「AがBだ」と「AはBだ」)のパラフレーズがどうして「BはAだ(今、おもしろいのは歌舞伎町ですよ)」という同一の形になるのかが説明できないだろう。それにもかかわらず、彼らは(1)(2)がパラフレーズによって「ハ」を用いた同一文へ還元されていることの奇妙さにすら注意を向けていない。

著者たちは「ガ」「ハ」の分析の後、週刊誌の見出しが「なぜ『今、歌舞伎町がおもしろい』であって『今、歌舞伎町はおもしろい』ではないのかは、右の分析で説明可能であろう(124-5頁)」と述べている。しかし私は、連想対象に目配りさせるか、それをマスクさせるかのちがいで、見出し語としての適性を判断するのは不十分と考えている。(2)の文が見出し語に不向きなのは、その機能の二重性故にインパクトに欠けるからだ。また(1)文の「ガ」には限定的な発見の機能があるので、この文には、見出し語としての文言自体に加えて、それがひとつの発見であるという印象も読者に与えることができるという効果の二重性を期待できるのである。見出し語としては重宝な表現だろう。

5. 以上の指摘で私が言いたかったことは、彼らが間主観的に共有可能なものとして規定しようとしてい

る「テニヲハ」の働きも、言語運用の個人的な経験によるもので、その枠を越えることはないだろうという点である。彼らはこれを暗黙知としているので、私の内部にあるこれに関する暗黙知を根拠にすれば、私は彼らのオペレータ機能に満足するはずなのだ。また、満足を覚えなければ、実際そうしたように、私は私の暗黙知に基づいて彼らの規定に反論を加えてもいいのである。従って私は上で行った自分の反証にそれ以外の根拠も持たないし、学問的な批判に耐えうることを述べたというつもりもない。どんなに学問的な考察を重ねて理論的な武装を施そうとも、その研究過程で研究者が最後の拠り所にしてしているのは自身の言語に関する経験でしかあるまい。つまり、彼らと私の助詞に関する私見が異なることを示せばそれだけで、間主観的に共有可能な機能ということに関して、私は反証しえたことになるわけだ。

以上の『コトバの〈意味づけ論〉』に対する検討から、この理論は私の目には、最も基本的な所で破綻しているように見える。「コトバ」という他者と共有不可能な概念を出発点としながら、コミュニケーションの可能性を追究しているこの理論は「足のない」幽霊にしか見えないのだ。「コトバ」とか「状況」と彼らが命名した何事かは存在しえない。人間にあるのは「言葉」と「情況」だけである。意味の所在は徹頭徹尾、個人の経験の内部である。この場合、それなら他者とのコミュニケーションはどうして可能なのか、という問いは不毛だ。コミュニケーションの成立とは、「愛」とか「平和」といった言葉と同様、コミュニケーションという言葉に対する個人的な意味が生み出した虚構でしかないからだ。これらの言葉と唯一異なるのは、現に我々が言語を使ってそれらしきことを行なっているという点だが、我々が実際に成していることと、コミュニケーションという言葉に関する信念とは別のことだと私は思う。コミュニケーションは成立するものであつて欲しいという願いと、実際に人間が行なっている言語行為は分けて考察されるべきである。『コトバの〈意味づけ論〉』には、こうした視点が欠けているように私には見える。

6. そういう視点で言語コミュニケーションを捉えるとき、Ungeheuer が示しているコミュニケーション観は非常に有益である。彼は「前判断 Vor-Urteile」という考え方について、研究者が行なう理論構築の最初の段階を執拗に追究しながら、次のようなことを述べている。

Ungeheuer によると、外的な条件が同一、同質だと仮定される状況下であっても、人間の経験の内容は原理的には人によって多種多様である。経験的社会科学の研究者は「それらの経験内容を類似した、仮説的に同型の、反復的に現われる出来事 (290 頁)」としてまとめなくてはならない。研究者は理論構築の第一段階で、理論によって説明される対象であると同時に、その理論を根拠付けてもいるこの彼自身の経験の内容を記述する *beshreiben* ことになるのだが、経験内容を言語の鋳型にはめ込む作業について Ungeheuer はこう述べている。

自分の経験を自身で伝える作業を成功させるには、それだけでもう、言語表現の一定の規格化、言語行為の一定の画一性が必要となるのであり、それによって、彼の伝える事柄は超個人的な同一性をもっているという印象を与えることができる。(中略) 言語化によるこうした規格化のプロセスへは、あいまいな知識とか推測が先入観 *Vorurteile* となって入り込むのである。そしてこの先入観が、言語の中のひとつの単語で命名されているものを、そもそも最初に構成するのだ。(291 頁)

研究者が理論構築の根拠にしてしている経験内容は全く私的な事柄であるが、それを他者と共有している伝

達手段である言語を使って表現することで彼は見せかけの一般性を手に入れる。言語は中立的な装いをしているが、問題はその次の段階にあるのだ。つまり、研究者が自分の経験内容を言語化した後、今度はそれを読んだり聞いたりする者がいて、その読者（聞き手）もまたそれについて何かを語り、書くのである。この時、読者（聞き手）の側で、ある単語から構成される経験内容と、理論を作った研究者のそれとが同一性を持つかどうかは検証のしようがないだろう。表現手段の共有ということは、そこから構成される経験内容の共有ということの担保にはなりえない。『送り手』、『受け手』、『コード化』、そして『コード解読』といったタームを備えた、コミュニケーションの『転送モデル』には、「話し手がひとつの単文を口にしたときはいつでも、その話し手が判断を述べているとか、何かを主張しているとか、あるいは真理値をもった命題を述べているのかといった解釈をすぐに提示できるという観察の視点」があるのだが、「他方これに対して、聞き手がこの単文を理解するとき、彼が判断し、主張し、真理値をもつ命題を述べるということについては誰も語らない(295頁)」

研究者は決して無前提に理論構築を始めるわけではない。自らの知覚に基づいた経験はもちろん、言語を媒体として得る他者からの引用もすべて、彼の経験内容を形作っている。そして今度は経験を被る者から書き手、話し手として書いたり話したりするのだが、彼が何かを記述し始める第一行にはすでに、本人がそれと気づいているかどうかには関わりなく、彼の経験内容がもたらす先入観が流れ込んでいるのだ。その理論の正当性も彼の経験内容から離れたところで保証されるものではない。Ungeheuer の指摘する意味での、理論の根底にあるこうした先入観は、経験内容の個人性と言語の使用を前提とする限り、原理的には取り除くことはできない。Ungeheuer は、取り除くのではなく、むしろそれに肯定的な意味づけをすることを提案している。この時、彼は先入観とは言わずに、それを「前-判断 Vor-Urteile」と呼んでいる。

記述 Beschreibungen から前-判断を締め出すことはできない。記述中にはしかし、理論によって説明されるべき対象であると同時に、それ自身は自らに妥当するものとして理論を根拠づける経験内容が、あらかじめ与えられてしまっている。だから、前-判断を排除しようとして、前-判断の内容や輪郭がぼやけさせられてしまうだけに終わるより、むしろ前-判断を明確に記述の中で際立たせる方が、有効なのだ。そうすれば、前-判断に関して議論することが可能になるのであり、それを拒絶したり受け入れたりすることが可能になり、また、それを拒絶したり受け入れたりするための基準を見つける試みも可能になるのだ。(299-300頁) (強調はUngeheuerによる)

かくしてUngeheuerのこの試論自体が、彼の「発話、伝達、理解に関する前-判断」の提示ということになるのである。前-判断という言い方をすることでUngeheuerが目論んでいるのは、研究者の理論の価値の相対化であると同時に、そのことからコミュニケーションの連鎖の可能性を生み出すことだと言える。彼のコミュニケーション観に立てば、コミュニケーションは原理的には終着点がないことになる。Ungeheuerが研究者の理論構築に強い関心を寄せているのは、研究者の行なっている営みもまたコミュニケーションなのであり、しかもそれはコミュニケーション本来の姿を見せることのできる方法だと考えているからだろう。そういうコミュニケーションであるためには、研究者の描き出す個々の記述が、一般的・客観的に指定された理論としてではなく、研究者個人の経験内容に基づく前-判断の記述として見る視点が必要となってくる。そうすることによって、コミュニケーションがコミュニケーションとして機能できる回路が研

究者の間に開かれもするのだ。

前-判断の記述という認識は、コミュニケーションの稼動ということだけではなく、理論という言葉の使用範囲を拡大するという独自の見解にも通じている。Ungeheuerによると、前-判断に基づいているという点を認めれば、研究者の作り出す理論が特別視される理由はなくなる。日常生活において誰もが研究者と同様の手続きを経て理論を持っていると、彼は言う。

もし何かを記述するのであれば、それが誰であれ、すでにひとつの理論をもっているのであり、自らの経験に基づいて記述しなければならないことに関して、すでに何ごとかは知っているのだ。何が存在しているのか、何が存在しうるのか、世界には何が在るのか、そしてこの世界の事物はいかにして組み立てられているのかということに関する生半可な知識 *Halbwissen* はどれも先入観に基づく理論なのであり、それが経験の記述を規定する。これは、本人が知らなかったり、認めたがらなくても、先取りされた理論の諸断片が、研究者をその記述において規定するのと同じことだ。そして、人間に関して、こうした理論的な指定が人間の経験する世界を構成しているのだと言うのであれば、同じことが研究活動の世界にいる研究者としての人間にもそのまま当てはまるのである。(299頁)

7. Ungeheuer がかなりのスペースを割いて述べてきた前-判断に関する見解には、その後で述べられる彼のコミュニケーション観が先取りされている。彼はコミュニケーションを巡って、「人間」「コミュニケーション行為」「記号」という三つの基本仮定を検証する。以下 Ungeheuer の記述にしたがって簡単にその見解を整理してみよう

Ungeheuer にとって人間は何よりもまず、「何かを」経験する存在として規定される。例えばナイフで指を切ったとしたら、その痛みが「何か」に当たる経験内容である。それは他の種類の痛みとは別の痛みとして知覚されるだろう。人間は自分が今何を経験したかを知りうるのであり、同一の経験内容を反復して経験することによって人間は疑いような確信をもって外的な世界を仮定することができるようになる。経験内容とは別に、当の経験そのものを Ungeheuer は経験行為として区別するのだが、経験行為自体も再帰的に自己経験の経験内容となる。

人物 A と B が同じ部屋にいて歓談しているとしよう。この時 A と B の両者は場所・時間・数に基づいて同定される同一の事態や事物、そしてお互いを知覚的に経験している。「観察可能なあらゆる事物、観察者以外の人間もそこに入るのだが、これらをすべて、我々は自分の外部にある物として経験する (70-71 頁) (*Grundlagen sprachlicher Kommunikation* から引用。以下では G. と略記)」。これが外的経験 *äußere Erfahrungen* と呼ばれていることだ。ところで、A がリンゴの皮をむいているときナイフで指を切ってしまったとしたら、それを巡る何がしかの事態や事柄も外的経験として A・B 両者の経験内容となるだろう。だが A の知覚したであろう痛みは、A だけに分かる経験内容である。「人間の感情や痛み、思考や志向をそれで (例えば電気刺激を脳に与えるといった外部からの操作によって) 私は知ることはできない。それらを知ることができるのは当該の本人ひとりだけである (G.71 頁) (カッコ内の補足は小川による)」。これが内的経験 *innere Erfahrungen* と呼ばれていることだ。

こうした人間経験の二分化は原理的な構造なのであって、それが取り除かれたり飛び越えられたりす

ることはない。それはただ媒介されうるだけなのだ。そしてあらゆるコミュニケーションは、こうした「心的根源現象」の中にその出発点と動因を持つのである。経験それ自身とその内容はこうした内的領域に置かれるべきものである。というのは、他者に関して、他者が経験しているということ、そして何を経験しているかということ、経験できる人はいないからである。できるのは、そのことを知っていることだけである。(307 頁)

A と B が同じ時間に同じ場所にいた場合、外的経験に関して、それぞれの経験内容の記述が同一の事態や事物を指していることはあるだろう。その意味でこの両名はそれぞれが、自分たちは同一の(事物や事態を)経験したと記述することはできる。だが、A が、他者 B に関して、B も自分と同じ経験ををした、とは原理的には言えないのである。逆の場合も同じである。人間が経験される対象である場合は、A (B) はリンゴやナイフを見るのと同じようにしか他者 B (A) を見るができないからだ。「(無生物の事物に関しては機械測定や実験を通じて我々は知識を得ることはできるの) だが、こうした干渉をもってしても、生ある事物の場合は、その内的領域には到達しないだろう。この内的領域は、それが帰属している生ある個体の経験に対してのみその都度扉を開くのである(306 頁) (カッコ内の補足は小川による)」。したがって、結局のところ、外的経験にしる内的経験にしる、また、そこから得られる経験内容も、すべて個人的なものだということだ。A と B の間に経験内容の同一性がありそうに見えても、「その同一性は、人間にいかにも起こりそうな形で、媒介され、習得され、信じられ、あるいは構成されている(308 頁)」ものだ。だがこの経験の個人性ということこそが「コミュニケーション理論を構築するときの土台となる記述の第一要素として不可欠である(308 頁)」というのである。

外的な事態や事物、他者を経験していても、あるいは自身の内的領域に属する事柄を経験していても、人間は自分が今何を経験しているかを知ることができる。そして経験の行為自体も自己経験として再帰的に経験内容のひとつとなる。この個人的な経験内容が人間の内部に蓄積していくという見方を、というのはつまり、人間と経験内容の関係に、所有者と所有物あるいは容器と内容物という関係を転用することを Ungeheuer は回避する。彼にとって経験内容は単なる経験の結果ではない。

人間は、内的な中心を形成するものではあるが、受け入れ態勢の整った空き空間が満たされるだけの容器ではないのだ。人間はまた、彼が内容として経験していることを、自身の中で苦もなく自在に操って自分の望みのものを作り出すということもできない。彼は、自分が経験したことの内にいる個人としても生きており、その結果、彼は自分の経験した事柄をもはや自分の中にあるものとしては経験できないのだ。(309 頁) (強調は Ungeheuer による)

主体としての人間が経験内容を操るのではなく、経験内容が先入観となって人間の経験を制御するというのが Ungeheuer の考え方だ。人間が何かを経験する場合、人間はその何かをありのままの姿で経験することはできない。常に、すでにその人が持っている先入観に基づいて経験するのである。さらにこの先入観自体が、新たな経験によって変容してゆくのだという。Ungeheuer は、この内的な領域について過去の経験が作り出した構築物という比喩を使って、それが統一性、体系性をもつものだと述べている。だが、この時それを司る主体としての「私」が、その構築物の外部に前提されているのではない。「私」はその内

部にいたのであり、「私」にとってそれはひとつの世界なのである。そこでは「万事が言語によってすでに埋め尽くされてしまっているように私には見える（おそらくは言語以外の記号によっても）。つまり、言葉と、固着した定記* *Formulierungen* にしたがって秩序付けられ分類されていて、とりたてて考えるまでもなく言葉にすることができるように見えるのだ（311 頁）」。その経験の体系そのものが、一個人としての「私」の土台となっているのであり、「自己」という言葉から本人が構成するものを形作っているのである。研究者の理論構築が先入観に基づく記述であるということとの相同性から、*Ungeheuer* は経験に関する最後の属性として、それは理論的なものなのだと言う。（*本稿では試訳として *Formulierung* を「定記」、*formulieren* を「定記する」と訳している）

私はその概略を記述してきた、多くの要素からなる、構築と解体の絶えざる運動の中に見出される、そして時に私の中に流れ込んでくるものとして体験される経験の体系、この体系が私なのだが、これを私は抽象的に表現して私の個人的世界理論 *meine individuelle Welttheorie* と呼んでいる。私に関わりあう人間は誰もが彼の個人的世界理論を使って私と向き合っている。（312 頁）（強調は *Ungeheuer* による）

8. 人間の経験の個人性は、こうして個人的世界理論という独特の人間観を生むに至った。この考え方に従うなら、原理的には人間は相互理解には到達できない、あるいは相互理解の保証を失うことになるだろう。この場合、人間の言語コミュニケーション行為はどのようなものとして記述されるのだろうか。

人間の経験には、内的経験と外的経験に加え、さらに二つの区分があると *Ungeheuer* は言う。（夜の暗さ、喜怒哀楽、街の喧騒などといった）当人の意志に関わりなくその人が被らなくてはならないタイプの経験と、当人が意図して求めるタイプの経験のふたつである。この時コミュニケーションは、後者の志向的な経験を内的領域で行なうことにあたる。話し手は、聞き手に理解という内的な経験をさせようと志向し、聞き手は、話し手の内的な経験である志向を遂行しようとする。したがって、コミュニケーション活動の行為目標は、聞き手の理解という内的経験行為の成功という点に置かれている。

個人的な内的世界は外部に向かつては閉じられているので、周知のようにコミュニケーションパートナー間で同一のものとして経験される外的経験を通して媒介するしか方法は残っていない。このやり方を目的に合わせて実際に行なうとしら記号を使用することになる。一般的に私は、話し手のコミュニケーション行為を、理解という内的経験行為を聞き手に行なわせる努力と定義したいと思う。理解という内的な経験行為とは、話し手が伝達すべきこととして意図している知識内容あるいは知識内容間の結合の産出にふさわしいだろうと、聞き手が感じている行為である。こういう意味で話し手が言語定記、つまりひとつひとつの言語記号は、内的経験行為を遂行せよという聞き手に対するプランと指図 *Plan und Anweisung* である。このとき話し手は、聞き手の内的経験行為が、伝達しようと意図している知識内容を対象に据えているという仮定に立っているのだ。（316 頁）（強調は *Ungeheuer* による）

人間の内的経験が外部からの干渉に対して閉ざされている以上、上の考え方に立てば、聞き手の内的経験行為が理解に成功したかどうかは検証のしようがなく、それは、コミュニケーションの目標地点が永久に目標地点のまま留まらざるをえないということを意味する。つまり、同じ内的行為でありながら、話し

手は自身の個人的な世界理論に基づいて言葉を発し、聞き手は聞き手の個人的な世界理論に基づいて言葉を理解するので、話し手は自分の意図していた通りに聞き手が理解したかどうかを確認することはできない、反対に聞き手は自分の理解が話し手の意図にふさわしいものかどうかを確認することはできない。コード化とコード解読という概念を用いて、話し手の意図と聞き手の理解の間での合致を前提にしている、別言すれば、共有できる意味なり情報なりが両者の間で伝達可能だと前提してる従来のコミュニケーション・モデルが自明視してきた話し手と聞き手の対称性は、Ungeheuer の見解によると原理的にありえないということになる。彼はこれを「話し手と聞き手の非対称性 Sprecher-Hörer-Asymmetrie (315 頁)」と呼んでいる。こうした伝達可能性を否定した観点から見た人間のコミュニケーション活動においては、聞き手は、もしコミュニケーションの成功に近づきたいと思うなら、話し手が自分に対して発した指図に可能な限り服従しなければならない、すなわち「聞き手は、話し手の定記する言葉を通して、コミュニケーション目的のために、理解に関わる内的経験行為を自分に可能な範囲で制御(317 頁)」しなくてはならないのだ。Ungeheuer はこれを言語コミュニケーションの本質的な契機とみなし、「コミュニケーションにおける服属 kommunikative Subjektion (317 頁)」と名づけている。

コミュニケーション社会行為それ自体は、それを有効なものにしたいという意図のもとで行なわれるなら、不平等に、すなわち、非対称的に機能することになる。というのも、「話し手」と「聞き手」という名称は単に同定のラベルだというだけではなく、異なる活動を遂行している二人の人物を命名しているからだ。つまり、一方は支配的で、他方は服属的 subjunktional である。また、一方は主人で、他方はしもべである。そしてこうした関係は、それを完全に除去して、伝達の他の形式を發明する気がなければ、人間のコミュニケーションから追い出すことはできないのだ。(318 頁)

コミュニケーション過程における最もはなはだしい非対称性である、この話し手に対する聞き手の服属は、従来のコミュニケーション理論では等閑視されてきた観点だと Ungeheuer は言う。そこでは話し手と聞き手の立場は暗黙のうちに対等なものとして前提されている。つまり、両者の間に不均衡が生じうるとしても、コミュニケーション外的、社会的関係が持ち込まれる場合で、それはコミュニケーションモデルで考慮されるべき対象ではないということだ。しかし Ungeheuer は、この話し手に対する聞き手の服属という非対称的で不均衡な関係こそが、コミュニケーションの本質的な構図だと主張しているのである。そして、博愛を説く者も、民主主義を訴える者も、彼がコミュニケーションを望む限り、この服属を避けてとおることはできないのだ。Ungeheuer が警鐘を鳴らしているのは、この服属の契機が、それと気づかれることなく、社会的服従へ転化されてしまうことである。宗教的な教祖でもいいし、学校の教師でもかまわない。話し手は話し手のままであり、聞き手は聞き手のままで終わる、そんなコミュニケーション状況を考えると、そこでは服属がコミュニケーションの終了した後にも残る主従関係へいとも簡単に轉換されうるのである。この時忘れられているのは、人間は個人的世界理論に基づいてしか、話すことも理解することもできないという点である。社会的な主従関係は、力のある者の個人的世界理論を絶対化してしまう。これではコミュニケーションの回路は閉ざされてしまうことになるだろう。

9. 話し手と聞き手がそれぞれ異なる個人的な内的経験を通して行なう言語コミュニケーションには、伝

達面でも、理解の面でも成功を保証してくれるものはない。つまり、それには原理的に終わりが無いのだ。最終的に決着を着けうるのは、各人の個人的な世界理論でしかない。そういう意味で Ungeheuer は、コミュニケーション行為は、その成否に関して常に誤まり易い fallibel ものである、と言う。

Ungeheuer はコミュニケーション行為の成功を強く確信させる三つの契機を挙げている。ひとつは、コミュニケーション行為を取り巻く、コミュニケーションの性質をもたない、それ以外の上位の社会行為であり、人間がコミュニケーションの成功に対して抱く確信は、上位の社会行為の行為目標の達成から推論されるのである。ふたつ目は彼が「社会-知覚的コンタクト *sozio-perzeptive Kontakt*」と彼が呼んでいるもので、これはコミュニケーション行為の有無に関わりなく、外見や身振りなどについて相手に対してなされる評価であり、それがその人とのコミュニケーション過程に対しても好悪の気分や感情を引き起こし、コミュニケーションの成否を確認作業を左右するのだ。三つ目は、文化的に習得されるコミュニケーション行動のコントロールである。個人的世界理論の中には、自分以外の人間以外の人間とも共有可能だと、つまり社会化されているとみなされている習慣化されたものがある。年長者と話すときにはどうするべきか、自分の定記に対する相手の理解を確認するときは、どの程度までそれを進めていいのか、といったコミュニケーション行動に対する制御装置として機能する文化的に習得される要因のことである。Ungeheuer によると、これらの契機はどれも、コミュニケーションが本来もっている誤まり易さ *Fallibilität* という属性を隠蔽してしまう。彼が描き出すコミュニケーションの本来のメカニズムがもつともよく見える例として、彼は学問的なコロキウムにおける理論的なディスカッションを挙げて、次のような定義を行なっている。

発話や伝達、理解が、こういう意味で、それらを取り巻く活動や経験から十分に独立して行なわれう
るような社会行為のことを、私は原基コミュニケーション *kruziale Kommunikationen* と呼ぶ。(321 頁)

(強調は Ungeheuer による)

それは「コミュニケーション行動に属する行為や経験の力だけを借りて、それ以外の行為や経験の力は借りない、発話、伝達、理解の作業のことである(322 頁)」。原基コミュニケーションにおいては、いわば誤まり易さという属性が剥き出しになっているのだが、上述の、上位の社会行為、社会-知覚的コンタクト、コミュニケーション行動の文化的な制御装置のサポートを受けるコミュニケーション(これを Ungeheuer は「非原基コミュニケーション *nicht-kruziale Kommunikationen*」と呼ぶ)においては、コミュニケーションの成否に関する間接的な保証が与えられることによって、コミュニケーションの誤まり易さは覆い隠されているのだ。

10. では Ungeheuer の言う原基コミュニケーションにおいて、話し手は何を言語で定記し、聞き手は何を理解しているのだろうか？ 彼は、いわゆるラングとしての言語記号の体系を認めないわけではないが、記号生成の個人性が、記号体系の超個人性によって説明できるとは考えていない。

一方では、言語記号は、相互境界づけのよく知られた法則によって、すなわち言語を定義する個人とは無関係に言語とだけ結びつく形で、体系的に秩序付けられているように見える。(中略) 他方また、母国語を習得するのと同時に、習得された語彙と句が、発展しつづける自身の世界理論を秩序付け、

固定し、形成力を保つために使用されるという経験は、私の目には確かなことに見える。これを通して、語義 *Wortbedeutungen* が固着されるのであり、同様にまた、形態論的に派生した慣用表現や統語論的構成上の慣用表現も初めて意味論的に確定されるのだ。(324 頁)

語義の習得は個人的な経験において成され、言語記号はコミュニケーション過程で諸々の対象と結び付けられるのだが、言語の意味は決してそうした「対象」ではなく、知識の内容 *Inhalte des Wissens* だというのである（このとき語義は概念とは別物だが、概念もまた語義と同様、知識の内容だとされる）。したがって、*Ungeheuer* の描くコミュニケーションにおける話し手の指図と聞き手の理解の構図は、言語記号体系の中で確定されている語義と文法的な解釈の規則の水準を越えたところにある。話し手が何かを定記したとき、聞き手は線状に配列された記号の連鎖から、経験的に蓄えた語義と文法の知識を用いて定記全体の意味を知る。だが、このことがコミュニケーション行為での話し手の目標だというのではないのだ。定記から生み出された意味の知識は、聞き手に対して話し手が示したプランにすぎない。このプランに従って、聞き手は自身の世界理論を拠り所にして、伝達で意図されていたことを再構成しなくてはならない。

ドライブしていて、人物 A が B に向かって、「車は便利だ」と言ったとしよう。この時 B の反応はいろいろ想定できる。B の行なう返答の仕方ひとつ採っても様々なものが想定できるし、身振りだけで済ますかもしれない。あるいは黙って A の顔を見ながら A の次の言葉を待つかもしれない。また、二人の会話がある程度進んだ後で、再び A が「車は便利だ」と言ったとしたら、最初の同じ文言の定記とは異なる結果をもたらすだろう。B がどんな反応を示そうと、彼は A の定記について、意味論的に整合性を持ちうるような文法的検討を行なっただけではなく、話し手の与えたプランに基づいて、そこで意図されていたことを自分の世界理論に照らして再構成し、定記したり身振りを示しているのだ。A の定記の中にある「車」とはどの車のことなのか（今自分たちが乗っている車なのか、乗用車のことなのかトラックも含んでいるのか、一般的な意味で言っているのか）。「便利」とは、バスや電車、歩くこと、何と比べて便利なのか、ドライブできるから便利なのか、それとも日常生活の足となるから便利なのか、何か他の便利なことと比べているのか、また誰にとって便利なのか。そもそも彼が今この発言をしたのはどうしてか。B は A の定記に触れて様々な事柄に関して判断しなくてはならない。B が、前述のコミュニケーション行動を制御する文化的習慣を身に付けていれば、そうしたことをいちいち口に出して A に問うことはないだろう。しかし彼が内的行為として行なっている作業が、文法的な水準での意味の知識を超えていることは明らかだ。よく見かけることだが、こうした事態を知覚的に共有されうる状況のコンテキストから B の解釈に一定の枠を設定すると言う説明の仕方に *Ungeheuer* は懐疑的である。この場合、両者が何をどこまで共有しているかが明確にならない限り枠の設定はできないだろう。*Ungeheuer* のこれまでの前判断によると、そもそも両者の間に共有の事物や事態を明確に前提することはできないのだから、彼がこの方法を採らないのは当然だ。こうした事態から *Ungeheuer* が導き出す命題は明快だ。

原基コミュニケーションにおける言語的定記は常に省略的 *elliptisch* である。(327 頁)

これは「車は便利だ」という単文の場合はもちろん、話し手がいくら定記の数を増やしても、原理的にはそれも省略的にならざるを得ないという認識である。「車は便利だ」という単文に関してさえ、「話し手

は正しいものにせよ誤ったものにせよ聞き手の側の達成理解を直接知ることができないし、またそれと同様に聞き手も伝達されるべき思想が本来どのようなものであったのかということを確認することはできないのである(328頁)。同一の状況下にいることが、同一の経験をすることの保証にはならないということ思い出せば、Aが彼の広大な世界理論のどの地点から定記を成しているのかは聞き手Bには知りようがないことである。そういう意味で言語定記は常に省略的だと言える。

省略的にならざるを得ない言語定記は「パラフレーズ Paraphrase」によって説明と明確化が試みられる。「パラフレーズは、過去に一度定記されたものを、新しい語彙と新しい統語構造で、新たに定記する。(中略)意図されていた知識の内容はパラフレーズされても保持される。再定記によって理解過程には新しい行為プランが供されることになるが、理解する側の者はその新プランが同じ目標を持っていることを知っている(328頁)」。二つの文がある場合、一方が他方のパラフレーズか、それともそれぞれが別々の経験内容の定記なのかは、その言語構造を見ても分からない。それゆえ話し手は定記を重ねるとき、これから言うことは今さっき言ったことのパラフレーズだということを、「つまりね」とか「別の言い方をすると」などと補足して、聞き手に対して予告する。一見すると何でもないこの指摘も、Ungeheuerがパラフレーズを文法化しようとする変形文法の着想に否定的であることを考え合わせれば、文法的、体系的な水準だけで言語コミュニケーションを捉えることに異議を唱える、彼の主張の延長線上にあることは明らかだ。

例えば「私は彼を見ている ich sehe ihn」と言う文章は、意味の変更を被ることなく、文法的には常に「彼は私に見られている er wird von mir gesehen」とパラフレーズされる。しかしUngeheuerによると「この二つの文章が話し手によって意味化される得るので、明らかに両者はパラフレーズではなく、また聞き手にもパラフレーズとして解釈されてはならないようなコミュニケーション状況が存在する(329頁)」というのである。彼はこんな例を挙げている。「私は彼を見ている、でも彼は私に見られているのではない、彼の写真が私の目にとまったのだ Ich sehe ihn, aber er wird nicht von mir gesehen, sein Bild fällt mir in die Augen.(329頁)」。もし能動態と受動態の間での変形が常に同一の意味を保持するのであれば、言葉で表現されたこの例の状況を我々は想像することができないだろう。「私は彼を見ている」のだから、常に「彼は私に見られている」はずだ。しかしそうではない状況がこうして想定できるので、文法的な変形によるパラフレーズの説明はUngeheuerには受け入れることができないのだ。二つの文章を見たときにそれがパラフレーズかどうかを文法的な構造から判断することはできない。だから、話し手はパラフレーズによって前言と同一の目標を目指すのであれば、「すなわち」「換言すると」といった補足を行なって予告するのだ。

11. 同じ言い換えでも、パラフレーズと裏返しに当たる比喩化 Tropisierungen は、言語定記の差異を意味化することなのだと言われる。前者では同一の行為目標がふたつの定記を生み出すのに対して、後者ではふたつの異なる定記の差異がひとつの意味をもたらすのだ。「二つの単語が比喩的な関係にあるというのは、一方の単語の意味で、他方の単語の意味場にある何事かが言われている場合だ(330頁)」。例えば「車を足代わりに使う」という表現で、「足」という語は「車」という語の何事かを表わしている。さらに「車を足代わりに使う」と言う場合と、「机の足」と言う場合とではすでに「足」が表わしている何事かは異なる。「車」と「足」は、今やその組み合わせを比喩的と感じることもないが、過去のこうした比喩的な用法を通して語彙はその意味場を広げてきたと言えよう。言語体系の中に固定化された語義はこうした古い比喩化の堆積がもたらしたものののだとUngeheuerは言う。言いたいことに合わせて毎回新しい言葉を作り出すので

はなく、すでにある語彙のストックの中から見えそうな表現を選び出してくるという人間の言語の用い方を考えると、ある語を別の語の比喩として使用するのには避けられないことだろう。「人間の言語表現 Rede の本質的な特性は、意味の比喩的な tropischズレが頻繁に行なわれるところにある(330頁)」。このとき重要なのは人間の言語定記の省略的という属性と、そのために必要となるパラフレーズというコミュニケーションの手段が、言語の比喩化を生じさせる契機となっているということだ。

12. 比喩化の現象と隣接するものとして、Ungeheuer がさらに指摘しているのは、文として成された言語定記内の語と語のコンテキストにおいて各語の語義が被ることになる意味限定 Terminierung の問題である。「車は便利だ」の例で確認すると、「車」という語は日本語の語彙の中で一定の意味を有しており、自動車とも乗用車ともトラックとも異なる意味場を持っている。「便利(な)」という語にしても同様だ。どちらの語もそれだけを取り出した場合、その語の意味場を形成しているいくつかの意味の標識を想定できるだろう。こうした複合的な意味の標識は、例えば「車は便利だ」という文として配列された場合、それぞれの単語(この例では「車」と「便利だ」)が相互に限定し合うと Ungeheuer は言うのだ。このことは「車は速い」という文と比較してみればよく分かるだろう。両方の文で使われている「車」という語は、「便利だ」と結び付く場合と、「速い」と結び付く場合とでは、聞き手(読み手)の内部に浮かび上がってくる意味の標識は同じではないだろう。ここで重要なのは、意味限定も語彙のふるまいではなく、話し手と聞き手に委ねられているということだ。「話し手が、聞き手に理解行為に対する行為プランとして一つの定記を提示するのは、聞き手が彼の知っている体系的な system-bezogen 語義を適切に意味限定することで定記の意味を見つける術を知っているだろうと、確信をもって仮定できる場合だ(332頁)」。

13. 発話や理解を最初から最後まで個人的内的世界の次元で捉えようとする彼の視点から見たとき、例えば議論や口論という形をとるコミュニケーションの際にとりわけ問題になることだが、定記の真偽、妥当性はどうか量ればいいのか。このことに関して Ungeheuer が最後の前-判断として述べているのは、次のような独自の命題である。

言語コミュニケーションにおける定記はどれもすべて、論証の構造 argumentative Struktur を有している。それは、導入 Exposition、結論 Konklusion、この両者の間での推移の様相 Modalität 及びこの推移の正当化 Rechtfertigung に基づいて構成されている。(333頁)(強調は小川による)

この論証構造は、どんな定記にも、その規模の大きさに関わりなく見出せるというのだが、このことに関して Ungeheuer は次の三つの規則に注意を促している。第一に、定記内の導入、様相、結論、そして正当化の配列は任意で、その配列の仕方は話し手の決定に委ねられている。第二に、話し手の意志次第で機能上まとまりをもつ論証のユニットのすべてが明言されなくてもかまわない。聞き手の予備知識による補足を期待して、どれかを割愛してもかまわない。第三に、「言語的論証がもつ論証の構図は回帰的 rekursiv である(334頁)」。例えばひとつの論文を想定するといい。その論文には全体的な構図として論証のユニットが見出せるだろう。この最上位の論証のユニットのひとつひとつは、それ自身の内部で更にまた(第一、第二規則がそのつど新たに適用し直されて)論証構造に分節されているだろう。そしてこれは遡及的に

個々の命題にまで及ぶ。

「車は便利だ」の論証構造を確認してみよう。話し手がこれを述べる際に「車」の観念を最初に抱いたのなら、それがこの定記の導入になる。そして「車」に関する諸々の属性の中から「便利さ」を取り出したのなら、それを結論として「車は便利だ」と言えるだろう（「車」や「便利さ」に関する知識は聞き手に期待して、導入から結論への推移の様相は省いていると考えられる）。しかしこの文を発した人は「便利さ」を最初に思い浮かべて、それを導入にしていたのかもしれない。その場合は「便利な」事物に数えられるものの中から「車」を取り出して、それを結論として「車は便利だ」と言っていることになる（導入や結論の配列は話し手に任せられているので「便利なもののひとつは車だ」などと言う必要はない）。この単純な例文からは、「車」と「便利だ」のどちらを導入と捉えるかで二重の解釈ができるのだが、「文法的な関連から出発する純粋に論理的な文の分析は、二重の論証の解釈というこの事態を隠蔽してしまう（335頁）」と Ungeheuer は言う。この単文を見ているだけでは彼の主張は分かりにくいかもしれないが、誰かと歓談したり議論している場面を想定すると実感がもてるだろう。そういう場合、自分が目指しているのとは異なる方向へ話が展開することはよくあることだ。こちらはひとつの目標を目指して定記のパラフレーズを繰り返すのだが、聞き手は聞き手で自身の世界理論に拠って自らの話の方向を目指しているので、導入と結論を必ずしも話し手の意図していた通り、当該の定記の文構造から聞き取れるとは限らないのだ。話し手の意図せざる解釈を聞き手が成して、そのまま発話の役が彼に回ったら、話の方向は、最初の話し手が意図していたのとは異なる向きに向かうだろう。それを回避したければ、最初の話し手は次に発話の順番が回ってきたときに、聞き手にそういう指図のできるような定記を按配しなくてはならない。このとき話し手の言い方が悪いとか下手なのだといった当人以外の者のコメントは用をなさない。これは別言するなら、ある意図を表現するにはそれに最もふさわしい形があるのに、彼はそれができなかったという言い分になるだろう。それは文構造から話し手の意図を忠実に再現できると言っているのと同じことになる。

そういう意味で、あらゆる定記が論証の構造を有しているということは、定記が成されれば、それはその限りで（つまり、ひとり話し手にとっては）すでに導入から結論への推移は正当化されているのだから、常に真であり妥当なものだということになるだろう。導入から結論へ至る推移に対して、外部から一般的な判断基準を押し付けることはできないということだ。「推論ないしは論拠は、それ自体として妥当すとか妥当しないというものではなく、常に、ひとつの全く具体的な状況にいる人にとって、妥当するものであったり妥当しないものであったりするのだ（G.201頁）」。

14. 『コトバの《意味づけ論》』が実生活での人間のリアリティーに基づいてコミュニケーション、あるいはコミュニケーション行為を説明しようとしているのに対して、Ungeheuer はコミュニケーションそれ自体——原基コミュニケーション——のリアリティーに肉迫している。それは、日常のコミュニケーションから（それのおかげで我々がコミュニケーションの成立を確信できる）付随的な要素を剥ぎ取り、最も簡素な構成要素（人間と経験と言語）にまで煮詰めたところで初めて語ることのできるコミュニケーションの姿だ。そこでは、人間が現実世界に対して感じるリアリティーは、自らの経験世界に対するリアリティーである。言語という現実も彼の経験内容のひとつなのである。唯一彼に経験できないのが、他者の経験内容だ。Ungeheuer は人間のコミュニケーションの起源をこの点に見出しているようだ。言語を通して理解し合えるから、あるいは理解し合うためにコミュニケーションが行なわれるのではなく、全く反対

に、人間の相互理解ははなから不可能であるからこそ人間にはコミュニケーションが必要なのだ。人間は心もとない自身の経験世界だけを拠り所にして言葉を発し、言葉を解する。発せられた言葉の作用は「指図」と「服属」であり、話し手はその成功を確認することができないし、聞き手も理解の正しさを知ることができない。コミュニケーション行為での発話も理解も、そういう意味で賭けであり、「悲観論」的な（と批判されることを Ungeheuer は承知している）ものである。Ungeheuer は言語コミュニケーションの実相を、それに関する自説を前判断として記述することで実践しているのだ。

これに対して「意味づけやコミュニケーションにおけるコトバの意味のダイナミズムを重視する(51頁)」意味づけ論で扱われる意味とは、「意味づけする者によって意味づけられる意味である。また、それは、《状況内の意味》として主体内に現出するがゆえに、行動と生きることに関わってくる『生の意味』である(55頁)」という。こうした目標設定めいた言及に接すると、意味づけ論がますます、ある種の立場から行なわれる文学作品の解釈と重なって見えてくる。言語や人間、コミュニケーションはかくあるべし、といった著者たちの先入観がここから浮かび上がってくる。先入観から逃れる術がないのは Ungeheuer も指摘しているところだが、それが前判断として生産的な意味を帯びるのは、話し手の側でそれを自覚している必要があるだろう。彼らが「意味づけ論」を「生の意味」という料理を盛るための器とすべく、食材として用意した「コトバ」とか、それに関する知識である「ラングの意味、辞書の意味(126頁)」(これは「ラング」や辞書に記載されている語義のことではない。小川)といった名称で表現しようとしている事象は、私の内部にも外部にもどこにも見当たらない。私にとって言葉はすべて、すでに私の「意味づけ」を被ったものではないからだ。したがって私には彼らの「かくあるべし(意味づけは人間にとって生の意味であるべし、コミュニケーションは生産的なものであるべし)」という号令しか聞こえないのだ。

意味はそれ自体としてではなく、ある表現が他の表現と連鎖した形で私の中にある。ある語の意味は何かと問われれば、それが一般性のあるものかどうかに関わりなく、私には自身の中にある連鎖の型を再現することでしか答えられない。ある言葉の意味を知っているというのは、それを他の言葉で置き換えることができるということではない。すなわち意味の所在を問われれば、私の経験内容の中にある、と答えることはできるが、私自身にもそれは表現の連鎖という形でしか知ることができない。つまり意味とは、ある語が他の語に対して許している組み合わせ(「車」と「自動車」という組み合わせも、「車」と「便利な」の組み合わせも両方含意して)の可能性のことである。このとき重要なのは、こうした組み合わせを可能にしているのが、文法的な規則ではなく、私の個人的な経験であるという点だ。私は自分の経験が許す限りいくらかでも文法的な規則を逸脱できる。意味の所在は表現の連鎖のつなぎ目である。他者の話を聞くと私と同時にこの連鎖の型に合わせて自分も話しており、他者に向かって自分が話すときには同時にこの連鎖の型に合わせて自分の声を聞いている。これは「聞く」を「読む」に、「話す」を「書く」に変えても同じである。

そうした連鎖の型は安定したもので、Ungeheuer の表現を借りるなら、それは私には「見慣れた vertraut」(336頁)のものでしかない。人の話を聞いて理解したと実感するのは、話し手の定記に見られる表現の連鎖を自分の中にも見出した時である。つまり、それは自分には見慣れたもののひとつとなったのだ。しかし、それはこちらがそう解釈しているだけで、話し手の元々の意図など知りえない。ここで Ungeheuer の指摘した「服属」という観点の重要性が見えてくる。聞き手が話し手の定記を見慣れたものとして自分の表現の連鎖に滞りなく収めることができるというのは、その時点でコミュニケーションの継続が終わり、コミュ

コミュニケーション行為の「服属」がその外部にある「従属」へ転換される可能性があるという意味だ。話し手が権威ある立場の者なら、弁舌の才ある者なら、ブラウン管の向こうで一方向的に話す者なら、都合の悪いコミュニケーションを打ち切るのは簡単だ。聞き手に理解できるであろう、聞き手が見慣れているであろう、表現の連鎖をつむぎ出せば、それを聞き手はただ黙って聞いているだろう。話し手は話し手のまま、聞き手は聞き手のまま、コミュニケーションは終了する。

理解しあうことができる、あるいは理解しあうべきだという見解は、人間の生活を必ずしも豊かにしてくれるわけではない。それは見慣れたものに変えたいという人間の欲求に過ぎないのであり、しかも人間は全てが見慣れたものになってしまうと、退屈を感じるのだ。だから、先に引用した「あのアホが、ボタンを掛けちがいがあって！」といった表現に触れると、ある意味では不都合が生じるけれども、別の意味では楽しい気分になるわけだ。というのも私の中にはこの表現の連鎖（この慣用表現に関する知識のことではなく、それが使用されているこの一文全体の連鎖）が存在してなかったからだ。単に存在していなかっただけでなく、未だに私はこれを自分の中に取り込むことができないでいる。決して表現の「正しさ」の話をしているのではない。そんなものは私には分からない。また、私なら「もったいない」という表現を当てるコンテキストに、「いたましい」という表現を当てる年寄りの方言を聞いた時、比喩的に言うなら、私はその表現に拒まれたような気がするのだ。けれどもそれは貴重な拒絶である。

およそ動的とはいいがたい言語化された経験の束の退屈な拘束を、時としてこのようにほぐしてくれる表現（身振りや表情から言語テキストまで含めて）にぶつかることは、それ自体価値のあることだ。単に見慣れないというだけではない。全くこちらの解釈を締め出してしまふ、つまり、こちらの経験的な表現連鎖のストックのどこにも収まらない表現だ。こうした表現は、聞き手がコミュニケーションの服属に留まることを、ある意味では許さない。それを見慣れたものに変えることができるまで、聞き手は問い続けるだろうから。こうした表現にぶつかったとき初めて、私は「コトバ」を見たような気になるだろう。しかし今、上で見た例とて、「コトバ」のほんの始まりにすぎない。これもいつかは見慣れたものになるだろう。その先には、こちらが問い続けるしかないような種類の、他の表現に置き換えられることをかたくなに拒み続ける「コトバ」がある。「意味づけ論」とは逆に、私にとって「コトバ」は出発点ではなく、目指す先にあるものだ。

(ドイツ語非常勤講師)

参考文献

- Ungeheuer, Gerold : „Vor-Urteile über Sprechen, Mitteilen, Verstehen“ In : ders. : *Kommunikationstheoretische Schriften I : Sprechen, Mitteilen, Verstehen*. (Hrsg. von Juchem, J.G.) Aachen : Alano Verl. 1987. S.290-338.
- Lenke, N. / Lutz, H.-D. / Sprenger, M. : *Grundlagen sprachlicher Kommunikation. Menschen·Welt·Handeln·Sprache·Computer*. München : W. Fink Verl. 1995.
- 深谷昌弘 / 田中茂範 『コトバの意味づけ論』 紀伊国屋書店 1996.